学びの基礎指導の手引き

平成27年4月

滋賀県教育委員会

具体的な活動や体験を通して「学びの基礎」を育む

幼児期の「学びの芽生え」を児童期の「学びの基礎」につなぎ、子どもたちの学ぶ力をつけます

滋賀県教育委員会では、子どもたち一人ひとりの「確かな学力」を育むための基盤となる「学ぶ力」を高めるため、「学ぶ力向上　滋賀プラン」を策定したところです。「学ぶ力向上　滋賀プラン」では、学ぶ力をつけるための6つの視点（下図）を示し、これをもとにした6つのプランにより、子どもたちの夢と生きる力を育てることをめざしています。

本県の子どもたちの学ぶ姿には、学習の基本となる学びの姿勢や態度が身に付いていないことなどの課題がみられます。これらの課題解決に向けては、プランで示す6つの視点の中の「生活の中で学ぶ力をつける」ことや、「繰り返し努力したことを認め能力や可能性を引き出す」ことが大切であると考えます。そこで、小学校低学年において、主体的に学ぶ姿勢、学び方、学習規範など「学びの基礎」を身に付けさせることを目的とした「学びの基礎体験型学習プロジェクト」を実施することとしました。

このプロジェクトでは、幼児教育からの接続期にある低学年の児童には、具体的な活動や体験的な活動を通して「学びの基礎」を身に付けさせることが重要であると考え、就学前からの体験的な活動の指導のポイントについて「学びの基礎指導の手引き」としてまとめました。また、この手引きを活用した授業研究をすることにより、指導の重点の共通理解を図るとともに、各学校・園での実践を通して、子どもたちに「学びの基礎」を身に付けさせることをねらいとしています。

幼児は、自分の周りにある「人・もの・こと」などあらゆる環境との相互作用の中で、体験を深め、そのことが幼児の心を揺り動かし、次の活動を引き起こします。幼児教育では、遊びを中心として、頭も心も体も動かして様々な対象と直接関わりながら、総合的に「学びの芽生え」を育んでいます。

この手引きでは、幼児教育での直接的・具体的な体験を通して育まれる「学びの芽生え」が、低学年の「学びの基礎」につながることから、低学年の児童に「学びの基礎」を育む過程において、幼児教育で培われた「学びの芽生え」を基にして、子どもの発達の特性を生かす体験型学習を教育課程上にどのように位置づけ編成していくとよいのか、また、「学びの基礎」が中学年以降の学習へどのようにつながっていくのか、各小学校の低学年の教育課程の編成と実施の参考となる情報をまとめました。

本書は、初めて低学年の担任をする先生にも指導のポイントをイメージしてもらえるよう、具体的事例とともに説明しています。「学びの基礎」を育てるためには、どの単元で、どのような内容を、どう指導すればよいのか、各小学校で作成されている低学年のカリキュラムを今一度見直していただくとともに、日々の授業改善に御活用ください。

未来を生きる子どもたちが枝をはり、葉を生い茂らせ、たくましい大樹となり、豊かな果実を実らせるようにするためには、大樹の幹を支える、しっかりとした根っこが必要です。生きる力の要素の１つである確かな学力を育む基盤となるのが学ぶ力であり、基盤となる学ぶ力の土壌が、小学校低学年で育てたい「学びの基礎」であると考えます。

「学びの基礎」の３つの要素

①主体的に学ぶ姿勢

子どもが知的好奇心をもって意欲的に学習をする能力や態度、学ぶことの楽しさや成就感を体得すること。

②学び方

具体的な活動や体験を通して学んだり、試行錯誤を繰り返しやってみたりしながら、問題解決的に学んでいくこと。

③学習規範

学習規律の他に、学習用具の使い方や読んだり書いたり聞いたり話したりすること。

幼児期の「学びの芽生え」を児童期の「学びの基礎」につなげることで、子どもは安心し、自信をもって成長し、自立への基礎を育んでいきます。

「学びの基礎」を低学年の児童に身に付けさせるうえで留意することは、「幼稚園教育要領」等にねらいや内容として示されている５つの領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）とのつながりを考えることと、幼児教育で培われる「学びの芽生え」を生かすということです。

下図のように、幼児期の子どもは、遊びを中心とした生活の中で、様々な対象（人・もの・こと）と直接的・具体的な体験を通して学んでいきます。幼児期の教育は、５領域の内容を遊びや生活を通して総合的に学んでいく教育課程に基づいて実施されています。そして、児童期の教育は、各教科の学習内容を系統的に配列した教育課程に基づいて実施されています。

このことから、幼児期から児童期への接続期には、学校生活に円滑に移行していくためのアプローチカリキュラムやスタートカリキュラムが必要となります。

〔「スタートカリキュラム　スタートブック」（国立教育政策研究所 平成27年1月）を参考に作成〕

＜参考＞ 幼児教育の5領域の内容　【「幼稚園教育要領」（文部科学省 平成20年10月）より】

- ・心身の健康に関する領域 ・・・・・・・・・「健康」
- ・人とのかかわりに関する領域・・・・「人間関係」
- ・身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」
- ・言葉の獲得に関する領域・・・・・・・・・・・「言葉」
- ・感性と表現に関する領域・・・・・・・・・・・「表現」

５領域の内容については、「保育所保育指針」（厚生労働省 平成20年3月）、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」（内閣府・文部科学省・厚生労働省 平成26年4月）にも示されており、子どもの生活や遊びを通して相互に関連をもちながら、総合的に展開されるものであるとしている。

①主体的に学ぶ姿勢

子どもが知的好奇心をもって意欲的に学習をする能力や態度、学ぶ事の楽しさや成就感を体得すること。

幼児教育

■体を動かす
○いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。
○様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。　「健康」

■自立心を育てる
○自分で考え、自分で行動する。
○自分でできることは自分でする。
○いろいろな遊びを楽しみながらやり遂げようとする気持ちをもつ。
「人間関係」

■興味や関心をもつ
○自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。
○日常生活の中で数量や図形、簡単な標識や文字などに関心をもつ。
「環境」

■本に親しみ、想像する
○絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。
○日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。　「言葉」

■伝え合う楽しさを味わう
○様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
○自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。
「表現」

学びの基礎

【意欲的に学習をする能力や態度】
○学ぶことに興味をもつ。
○わからないことは、自分で調べる。
○自ら考え行動しようとする気持ちをもつ。
○がんばったことやできるようになったことに自信をもつ。
○新たな問題に果敢にチャレンジしようとする。
○思い切り体を動かして汗をかく。

なぜかなあ？
ふしぎだなあ。

【学ぶことの楽しさや成就感の体得】
○人と関わりをもつことにうれしさを感じる。
○自分だけでなく、仲間と協働して解決する。
○友だちとの触れ合いの中で、自己を発揮する。
○認められることで自己存在感や充実感を味わう。
○新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わう。

やったあ！
自分でできたよ。

【知的好奇心をもつ】
○興味や関心が芽生えたことに夢中になる。
○文字や数に興味をもつ。自然に興味をもつ。
○もっとやってみたいという気持ちをもつ。

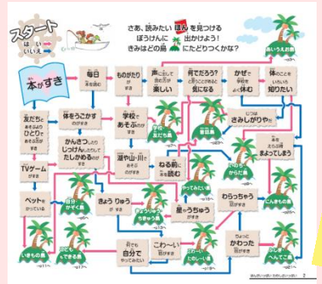
わっ！
おもしろそう。

具体的事例

事例1　国語科　安心　成長
「本との出会い・読書へのいざない」

【本の世界を楽しむ】
「新しい何かを知る」「考えを深める」「実際にやってみる」「物語の世界に入り込む」等、一緒に楽しむ雰囲気を作り出すことが大切です。「ほんがいっぱい　たのしさいっぱい」（右図：滋賀県教育委員会H26年3月改訂版）は本との出会い・本へのいざないに活用できます。

【「読まなければ」よりも「読みたくなる」へ】
始めを少し読んであげたり、挿絵を見せてあげるなど工夫をします。また、「良書」よりも「適書」と言われるように、子どもの興味や関心にあった本を選ぶことも大切なポイントです。



事例2　道徳　自立
「はしの上のおおかみ」

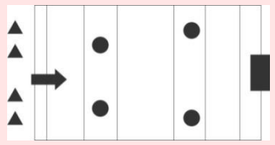
【役割演技の活用】
おおかみが、くまに橋を渡らせてもらった場面で役割演技を取り入れ、親切にされたときのうれしさについて考えさせることができます。教師がくまの役になり、児童がおおかみの役になって、橋を渡らせてもらい、くまの後ろ姿を見ているときの気持ちを実感として捉えさせ、そのときの気持ちを表現させるようにすると、自分もやってみたいという子どもの意欲が高まります。

【動作化の活用】
「えへん、へん。」と威張って一本橋を渡っているときのおおかみと、うさぎを抱き上げて渡らせてあげて、「えへん、へん。」と言っているおおかみとを動作化することもできます。
動作化によって、おおかみへの共感を深めさせた上で、最初と最後の場面の「えへん、へん。」の言葉に込められた気持ちの違いを考えさせるようにすると、子どもは、自分の思いを主体的に表現できるようになります。

事例3　体育科　安心　成長
「いろいろなおに遊び」

【しっぽとり】
「追う - 追われる」関係がわかりやすく、「しっぽを取られたらつかまる」というように、ルールも簡単なおに遊びです。外での学習の準備運動として最適です。

【ジャングルジムでおにごっこ】
ジャングルジムを登り下りする動きを使ってジャンケン遊びをします。はじめは先生とジャンケンをして、負けた子、あいこの子が地面まで下りてタッチをして、また上まで登る約束で始めます。子どもたちの動きに合わせて遊びを変化させていくことができます。



【宝はこびおに】
４人でチームをつくり、攻めのチームがおにをかわしながら自分のコートから宝（玉入れの玉、もしくは小さめのボール）を1個ずつ運んでいくおに遊びです。

指導のポイント　安心　成長　自立

■しっかりほめる、認める、評価する　成長
- 周りの子どもも「できているな」とわかることや子ども自身も「できているな」と感じていること、自分で気づいていないこと（教師が価値づける）をほめる。
- 自ら進んでしてきたことや進歩がなくても続けていることを認め、定期的に、客観的な評価をする。

■共感する　安心
- 「わかった」瞬間に一緒に喜ぶ。
- 子どもの思いに寄り添う。

■知的好奇心を刺激する　自立
- 子どもが感性を揺さぶられることによって芽生える興味や関心を大切にする。
- 少しだけ難しいこと（さらに良いこと）を伝えて、期待していることを示す。
- 既知と未知との「ずれ」を意識させる。
- 予想を取り入れて、課題を自分事にする。

不思議だなあ、おもしろそうだなあ、やってみたいなあ、どうなっているのだろう等、興味や関心が芽生える体験や導入の工夫が大切です。このことは、中学年以降の主体的に学ぶ意欲を育てることにつながります。

アクティブ・ラーニングにつながります

低学年において、子どもが知的好奇心をもって意欲的に学習をする能力や態度、学ぶ事の楽しさや成就感を体得することは、課題の発見と解決に向けて主体的･協働的に学ぶ学習、いわゆる「アクティブ・ラーニング」につながっていきます。

学ぶことの楽しさや成就感を体得するためには、具体的な活動や体験を通すことが重要です。

②学び方

具体的な活動や体験を通して学んだり、試行錯誤を繰り返しやってみたりするという問題解決的な学び方。

幼児教育

■見通しを持つ
〇生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する。「健康」

■人とかかわる
〇自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。
〇友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見いだし、工夫したり、協力したりなどする「人間関係」

■発見を楽しみ、考える
〇自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
〇身近な物や遊具に興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。「環境」

■自分の言葉で話す
〇したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。
〇したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。
〇いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。「言葉」

■表現を楽しみ、工夫する
〇生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
〇いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。「表現」

学びの基礎

【具体的な活動や体験を通す】
見てみたい。さわってみたい。やってみたい。

〇直接触ったり、操作したりして考える。
〇身近なものやことを見たり、聞いたりする。
〇教室の中だけでなく、外に出て活動する。
〇人とかかわり、一緒に活動したり、つくったりする。
〇身の回りにあるものを自分と一体として理解する。

【問題解決的な能力や態度】
あっ！できそうだ。

〇自分たちで問題を見付けて、解決しようとする。
〇これまでに学んだことを使って問題を解決する。
〇自分なりのやり方で取り組む。
〇環境に好奇心や探究心をもってかかわる。
〇仲間とともに問題を解決する。

もっとやってみたい。

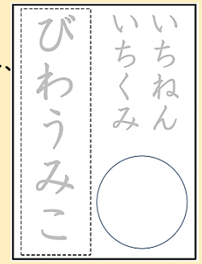
【試行錯誤を繰り返しやってみる】
〇試行錯誤を繰り返す中で、新たなものを創造する。
〇繰り返し努力することをいとわない、または、楽しむ。
〇失敗してもあきらめずに、最後までやりきる。

具体的事例

事例1　国語科・図画工作科等「よろしくねカード」で仲良くなる
安心　成長

入学直後のスタートカリキュラムに最適

【国語科：名前をかく】
ひらがなの読み書きを学習し始めたばかりの子どもたちの「自分の名前を書きたい」という思いを大切にし、整えた字を書くという技能が未熟であるという時期でもあることを踏まえ、無理のないカードづくりをすることが大切です。例えば、カードにはあらかじめお手本を薄く書いておき、それをなぞることから始めるなどの配慮をするなど、子どもが安心して取り組めるようにします。



「よろしくねカード」の例

【図画工作科：好きな〇〇をかく】
カードの〇の部分には、自分の好きなものをかかせます。「自分の好きな食べ物」「自分の好きな虫」「自分の好きな人」など、自由な発想で思い切りかかせます。うまく絵がかけない子どもには、大きめのスタンプを丸の中に押したり、好きな色のパスを選んでぬったりして、意欲がわくような支援を工夫します。

【国語科：「よろしくねカード」を交換する】
全員で交換する前に、ペアやグループで練習しておくと、自信をもって活動に取り組めます。拡大図を用意するなどの視覚支援の他、「話す型」（③学習規範を参照）を準備しておくことも、子どもにとっての安心材料になるでしょう。言葉で相手に伝えるという活動そのものを楽しめるように、教材の準備を入念にしておきます。

事例2　生活科「動くおもちゃづくり」
成長

ー試行錯誤・多様性を大切にするー

動くおもちゃづくりの学習は、身近にある自然や物を使って工夫をして、素材の面白さや自然の不思議さに気付いていく活動です。気付きの質を高めるという視点から、試行錯誤がしやすい「ゴム」を使うことが多いです。大小のゴムや太さが違うゴムなど力の大きさの違いによって、法則性に気付かせようとする授業も見られます。しかし、これが行き過ぎてしまうと「自分が工夫をしてつくった動くおもちゃ」という子どもの思いや願いからは離れていってしまいます。

学習指導要領解説には、身近にある素材として、紙、ひも、ポリ袋、空き缶、空き箱、ストロー、割り箸、ペットボトル、牛乳パック、紙コップ、トレイ、輪ゴム、磁石などが例示されています。「面白さや不思議さ」は、素材の多様さや試行錯誤の中から生まれるのです。

事例3　特別活動「雨の日の遊びを決めよう」
成長　自立

学校のルールの範囲内で、雨の日の遊びのきまりや方法を自分たちで話し合い、きまりをつくって守ったり楽しく遊んだりすることで、学級集団の秩序をつくり、子どもたちの規範意識を育てます。

学級会では子どもたちの話合いを見守ることが基本になりますが、事前の指導は子どもたちがよりよい集団決定ができるように積極的に行うことが必要です。楽しく豊かな学級の生活をつくりたいという課題意識をもって、自分たちで問題を見付けたり話し合ったりして解決することを通して、周りの子どもと仲よく助け合い、身近な人に親切にし、みんなのために活動するなど自発的、自治的に学級生活を楽しくしようする態度を育成します。

低学年での学級会活動での成功体験から、自分たちでよい学級を作ろうという気持ちが芽生え、高学年になるとそれが、学校をよくしていこうという気持ちに発展していきます。

指導のポイント
安心　成長　自立

■身近な事象を取り扱う　安心
・子どもたちの身のまわりにあるものを教材化する。
・子どもにとっての必然性の高いものを教材化する。
・児童が思いついた方法をすぐに試せるような環境を用意する。

■活動に没頭できるようにする　成長
・時間や場所にゆとり持つこと
・上手くいかなかった理由を考えて失敗を生かす。
・繰り返し学ぶこと、あきらめずに学び続けることを価値づけて、意欲を持続させる。

■子どもの多様性を保障する　自立
・子どもの創意工夫を生かし、イメージを広げる。
・出来栄えではなく、学びの過程を評価する。
・一人ひとりの表現や思いを大切にする集団づくり。

■共同的な学びにする　成長
・グループで学び合う活動や、自分の考えを伝え合う活動を取り入れた共同的な学びにする。

「先ずはやってみる」「繰り返しやる」「続けてやる」「やろうと思えばできる」等、子どもに自分なりのやり方でやりきらせることが大切です。上手くいかなくても、粘り強く課題に取り組む力や探究する心を育てます。

探究的な学習につながります

子どもが試行錯誤を繰り返しながら学んでいく「学び方」は、中学年以降の探究的な学習につながっていきます。

自分なりのやり方や多様性を保障することは、「何を学ぶか」から「どのように学ぶか」という、問題解決的な学びのプロセスを大切にすることであり、学びの質や深まりを重要視することです

③学習規範

姿勢や態度の他に、学習用具の使い方や読んだり書いたり聞いたり話したりすること。

幼児教育

■健康な心と身体を育てる
〇健康な生活のリズムを身に付ける。
〇生活に必要な活動を自分でする。　「健康」

■規範意識の芽生えを培う
〇よいことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。
〇友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気付き、守ろうとする。
「人間関係」

■生命やものを大切にする
〇身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。
〇身近な物を大切にする。　「環境」

■話を聞く、話す
〇生活の中で必要な言葉が分かり、使う。
〇人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。
〇親しみをもって日常のあいさつをする。
「言葉」

学びの基礎

【姿勢や態度】
片づけると気持ちいいな。

〇先生や友達の話をしっかり聞く。
〇学習中、姿勢を保つ。
〇身の回りの整理整頓をする。
〇授業と休み時間の区別など時間を守る。
〇学習課題にすぐに取り組む。
〇下敷きを敷いて、ノートをとる。板書を写す。

【学習用具や用具の使い方】
準備ができていると安心。

〇学習に必要な用具が揃っている。
（不要な物は持ってこない）
〇正しい鉛筆の持ち方で文字を書く。
〇学習用具を大切にする。

【話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと】
みんなに知らせたいな。

〇黙って手を上げて、指名されてから発表する。
〇話を聞くときは、話し手の目を見る。
〇自分の考えたことを書く。

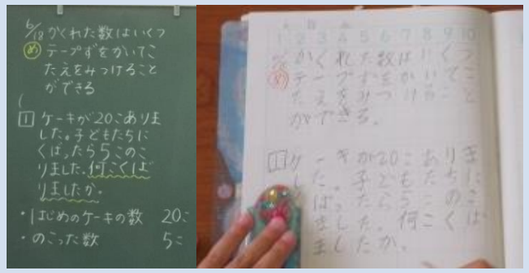
具体的事例

事例1　安心　成長
「ノートのつくり方」

【ゆっくり、しっかり、丁寧に】
書くことへの抵抗感を少しでも軽減する目的で、プリント学習をすることがありますが、低学年でできるだけノートをつくるという経験をしておくことが重要です。
時間がかかっても、しっかりと丁寧に書くことを評価すると、「次も頑張って書こう」という気持ちにつながります。

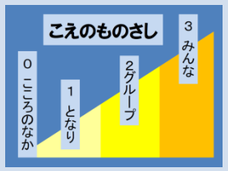
【板書はノートの手本】
教師の板書の字の形や字配り、筆順に至るまで子どもはそのまま真似てノートに書きます。教師自身が丁寧な板書に心がけましょう。また、丁寧で整った板書は、授業に良い緊張感を作ります。

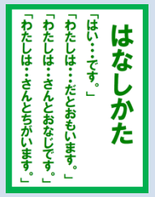
【板書とノートの連動】
ノートを使いはじめる時期には、子どもの使うノートのマス目を考えて板書の改行をします。こうすることで、板書とノートが連動し、子ども自身が板書をしっかりと写せたという実感を得ることができます。



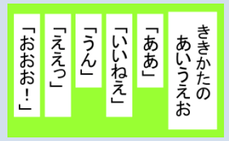
事例2　安心　成長
「話す・聞く」

【話す型・声のものさし】
あらかじめ「話す型」を示しておくと、子どもが安心して話すことができるようになります。「声のものさし」も話し方をお互いに確かめ合うのに効果的です。





【人の話の聞き方】
子どもが自信をもって話せるためには、みんなに聞いてもらえるという学級風土が必要です。



事例3　生活科　成長　自立
「アサガオと糸電話で話をしよう」
ー生命あるものへの愛着と道徳性を育むー

子どもたちは、毎日の水やりや観察活動を通して、自分が育てているアサガオに愛着をもちます。そして、生命あるものとしてアサガオの成長と自分の成長を重ね合わせて気付きの質を高めていきます。
アサガオと糸電話で話す活動は、低学年の児童の発達の特性を生かした活動です。飼育栽培活動を通して、生命あるものを大切にする心をはぐくみます。

指導のポイント　安心　成長　自立

■共通理解から共通実践へ　安心
- 全校で統一した約束で指導する。
- 誰もが分かるようにする（例：各教室に掲示する、ガイドブックを作る、保護者にも説明する等）
- できたことをほめ、認めることで、学習習慣の定着を図る。

■成長を見守る　成長
- 指導の重点を絞って取り組む。
- 変化が見られるまで粘り強く続ける。
- 実現可能な目標を立ててレベルアップを図る。

■自立への基礎を養う　自立
- 自分でできることは自分でさせる。
- 自分たちで決めた約束は必ず守らせる。
- 成長や伸びを子どもにフィードバックする。

約束事を自分たちで決めるようにし、それを守れたらほめる。そのことで、みんなで決めた約束を守る気持ちよさや、守れた喜び（自信）を味わわせることが大切です。そして、さらに次も頑張ろうとする意欲や、仲間のよさの実感、自分の成長の実感につなげましょう。

学習習慣の定着につながります

学びの姿勢や態度の他、学習用具の使い方や読んだり書いたり聞いたり話したりすることにおける学習規範は、集団や実生活の中で人とのかかわりを通して、体験的に育成されます。
実体験を通して育成された学習規範は、自ら学ぶ学習習慣の定着につながります。